

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 5 NO. 1

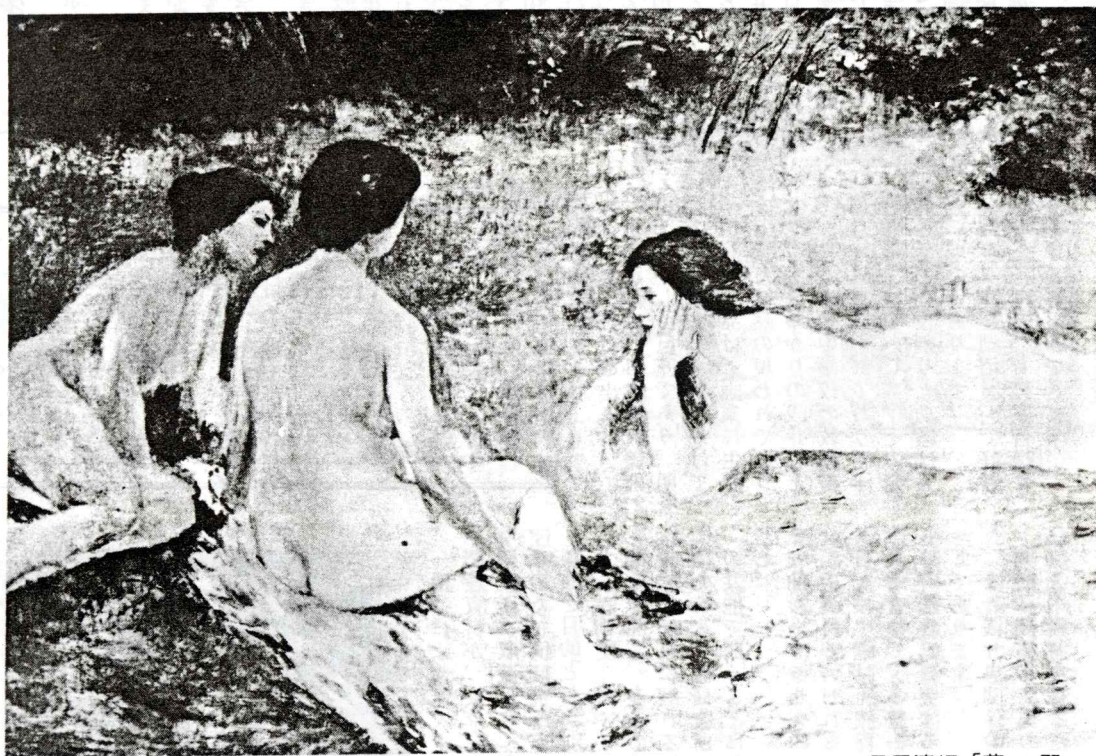
昭和53年4月24日発行

編集・発行人 市原 正夫

〒280

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311(代表)



黒田清輝「花野」

観潮台

東京国立文化財研究所のご
好意による「黒田清輝展」の
準備の過程で、日本近代美術
史のあれこれを考えることが
多かった。

アレックス・ヘイリーの書
いた「ルーツ」以来、このル
ーツという言葉が流行し、あ
らゆる分野での根源への追求
が盛んになっている。

別に流行を追うわけではな
いが、千葉県立美術館では、
偶然だが日本近代美術史のル
ーツを意識して、関連作品を
収集しながら、同時にフィル
ド・ワークを展開してきた。

こうして「黒田清輝展」も
開催することになったが、こ
こで軽視できないことは、黒
田清輝をはじめ浅井忠・和田
英作ら多くの画家が、フラン
ス留学中に滞在し画業に励ん
だ、パリ南郊のグレー村での
歴史である。

典型的な日本近代美術史の
ルーツを秘めたこの村は、隈
元謙次郎・陰里鉄郎氏ら一部
学者の注目を受けたが、いま
なお日本近代美術史での位置
づけは正當でなく、大きな課
題になっている。

(高橋在久)

新年度を迎えて三つの夢

館長 市原 正夫

開館五年めの新年度を迎え、入館者も四十万人を突破し、ようやく県民の皆様、その存在を、御理解いただけるようになってきました。

本年度は各方面の御協力をいただき、さらに、展覧会等内容の充実とその普及に努める考えですが、特に夢の多い年にしたい、と思っています。

それは、待望の美術普及棟の実施設設計が、県当局の御配慮で、予算化されましたので、ぜひ、廿一世紀の時代をめざす、機能的な設計をすすめ、来年度早々にも、建設にかかっていただけるようにしたいです。

立派に完成されたホール、実技教室、図書室などで、各種事業が展開され、それぞれの立場で、いきいきと利用されている皆様の姿が夢のように浮んできます。

つぎに、本年度は「県展」も三十回を迎え、県美術会が中心となって各種記念事業

業をすすめています。その中で、浅井忠の記念像を県内各界の御後援をいただき、館の前庭に建立されることになりました。

美の殿堂にふさわしい、堂々たるブロンズ像が、この秋に、あの芝生と植込の中に出現し、これを見上げて、わが国近代洋画の先駆者浅井忠に想いをさせる姿、これも今の夢です。

それから、「黒田清輝展」「天折の画家たち」等ユニークな展覧会のみる企画、映写機・テレビをも導入した楽しいかたる活動の展開、七宝焼等を加えたつくる活動の拡充等多彩な事業に、東山魁夷展に寄せられたと、同様の盛上りが見られ、皆様が続々と県立美術館に訪れてくださる姿に今一つの夢を描いております。

「三つの夢」、この実現に皆様の絶大なる御協力、御援助を心からお願ひして新年度を迎えての御挨拶とします。

特別展——近代日本洋画の巨匠——

黒田清輝展

昭和53年4月27日～5月28日

開催の意義

黒田清輝は、日本近代美術史上輝かしい巨匠であり、明治中葉から大正末期にかけての多彩な作品は、画業に生涯をかけた情熱の現われであります。本県ゆかりの浅井忠とともに、小・中学校の教科書にも位置づけられており、洋画界の先駆者として、その発展に尽した役割りと功績は大きいものがあります。

昨夏「海と湖沼展」で好評を得た「湖畔」も再度皆様に展観することが出来ます。



昔語り下絵

遺言によって、主な作品や関連資料が、東京国立文化財研究所に収蔵されております。このたび同研究所が地方文化振興を目的とし、特別展を開催し、美術史上輝やかしい画期的な作品を、多くの皆様に直接的に耳目に触れる機会をもつために、同研究所と本館との共催で開くことになりました。

少・青年時代

一八六六年（慶応二年）に鹿児島藩士の黒田清兼の子として生まれ、幼名を新太郎と名付けられました。五才の折に伯父黒田清綱の養子となり、小学校は東京の三番小学校（現赤坂小学校）に入学し、恵まれた環境で養育され、十才の折に清輝（せいき）と改名しました。父（後に元老院議員）は、将来立派な政治家となることを期待して、一般教養を身につけさせるため、日本画を狩野派の樋口探月・鉛筆画や水彩画を細田季治に依

頼して勉強させています。また、平河学校長の斎藤竹海や二松学舎に学ばせ、和・漢学や剣道も修業しております。更に神田共立学校では英語を、そしてフランス語を井田鍾次郎や寺尾寿らに学ばせるとともに、外国語学校ではフランス科に入学させて、文武両道を習得させて、立派な政治家としての基礎的な素養を少・青年時代に体得させています。

十九才の二月(明治十七年)には義兄の橋口直右衛門がフランスの公使館の書記生として赴任する際に、一緒に横浜から、約一ヶ月半の船旅で、パリに到着し、いよいよ、法律学を修学するための一歩を踏み出しました。

フランス留学時代

パリの法律大学校で勉強しているうちに運命的な出逢いがありました。それは洋画の留学生、藤雅三を知ったことです。藤の紹介で、フランスの青年画家、ラファエル・コランから絵画を学ぶことができたからです。

フランスでの生活三ヶ年で画業へ転向し、父母にも理解され、絵画に専心することになりました。全精力を發揮し、

画材を求め、ベルギー・オランダ・スイス・そしてプレハ島・パリ郊外のグレー村などに生活して、多くの作品を制作しております。

今度の展覧会でも「パリー風景」「編物」「赤髪の少女」「プレハの海岸」「風景(グレイ)」「裸婦習作」などがみられます。

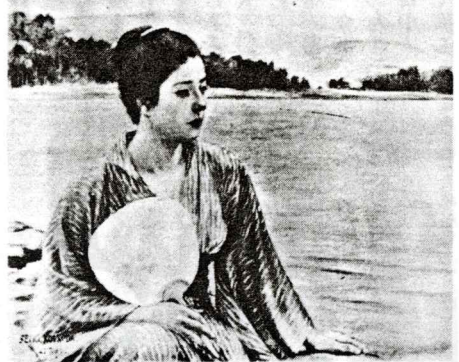
二十八才の夏(明治二十六年)アメリカ經由帰国し、いよいよ、滞欧で学んだ力を發揮し、洋画界での活躍がはじまりました。

裸体画への先見

日本で初めて裸体画が公表されたのは一八九五年(明治二十八年)に京都で開催された第四回内国勸業博覧会で「朝妝」が出品されたことからです。

朝妝はフランス留学時代の一八九三年に描いたもので、目覚めたばかりの若い婦人が鏡の前で髪をくしげづついている図です。これは黒田の代表的作品です(第二次大戦中に焼失)。

明治中期頃は、婦人の裸体美術に対しての理解が浅いの



湖畔

で多くの賛否両論が出され、全国的な反響をよんだようです。しかし黒田は「日本の美術の将来にとって、裸体画は悪いことでなく、大いに奨励すべきである」と自分の信念を披瀝しています。

その後日清戦役にも従軍しその時の作品「金州城図」は同時期に従軍した浅井忠の作品とともに、歴史的スケッチとして、同時に鑑賞していただきたいと思います。

主な作品について

白馬会の結成により、明治美術会派に対して、自由主義的な立場から、比較的明るい黒田の作品は新派とも紫派とも呼ばれ、脂派(やには)と

は異なった傾向でした。

白馬会の第一回展に出品した「昔語り」は、京都旅行の折に、洛東の清閑寺の僧から平家物語の説話を聞いている若者や舞妓などの群像をまとめたものです。大画面を構成するための画稿は、当時の作家に大きな刺激となったようです。

「湖畔」は一八九七年、箱根の芦ノ湖を背景にして、湖畔に腰をおろしてくつろぐ、照子夫人をモデルとしたもので、その端麗な顔には、多少エキゾチックな感じも残っており、日本人としての油彩画を自覚的に志していたといわれている作品です。

ポスターになった「もるる日影」は一九一四年の作で、光とあけない少女姿がよく調和されています。

「栗拾ひ」は一九一八年作で、国民美術協会第六回展に出品され、人物の健康的な表情と単純化された配色に作者の意図がみられます。

「梅林」は梅の疎林をベインテング・ナイフを交えた草々たる筆触で描いたもので最後の作品といわれています。

美術界にとどまらずに、教育者として、東京美術学校教

授や教育評議会委員、そして行政的には、外務省の情報部嘱託として、また政治家としては、貴族院議員として、多くの業績を残して、一九二四年(大正十三年)に五十九才でこの世を去りました。

今回は画業に転向した、フランス時代の作品から、最後の作品までの作品群と遺品等を展示し、あらためて黒田芸術を、新しい視点から理解していただけたら幸いと思います。

美術講演会

特別展に伴い次のとおり開催します。

演題 「黒田清輝と明治絵画」
講師 陰里鉄郎(東京国立文化財研究所美術部主任研究官)

日時 5月6日(出)
午後2時より 無料
会場 本館美術普及室

入場料

大人三〇〇円(二〇〇円)、
高・大学生一〇〇円(一〇〇円)、小・中学生一〇〇円(五〇円)、カッコ内は20名以上の団体料金

特別展「東山魁夷展」を想う



作品展示室

あふれる熱気

現在活躍中の作家の中でも東山魁夷ほど数多く展覧会がもたれている作家はまずいない。そこで今迄のとは少し違うものをといることでこれまで公開されることの少なかった作品をなるべく多く入れようということにスタートした。

「彩林」「門」「霧」「白い壁」「冬の上」「残陽」「秋径」「簾」また初公開の「朝静」「涛声」などこれまで東山魁夷展をみてきたファンにとっても珍しい作品が多く、たえまなく続く人波で会場は熱気にあふれ、開館以来の四一、五三〇人という入館者を迎えた。

県内はもとよりであるが県外からの愛好者も多く、今期の後半が春休みと重なったこともあって、従来以上に小・中学生の姿や家族連れで楽し

む光景が多かったのも、この展覧会の一つの特徴であった。ベビーカーもフル回転。東山魁夷の絵によせる層の厚さ、広さに今更ながら驚かされた。

日本画への理解を

「洋画はわかるが日本画はどうも」という声はよく聞かれる言葉であるが、そこで、日本画というものを少しでも理解してもらえたらという意図も含めて、資料室では日展等の出品画の小下図、唐招提寺障壁画「山雲・涛声」の制作過程を展示してみたわけである。

数多くの習作から20分の一の小下図、5分の一の中下図、



資料室

試作、5分の一の割出図、原寸大の大小下図を経て完成へ。完成図が写真でしか紹介できなかったことは残念であるが、一つの障壁画がこのような、準備段階を経て描き上げられていくことを初めて知った人達も多かったようで、作品鑑賞とはまた違った共通の話題として話し合っている光景も少なからず目にした。

現在の日本画が全てこのような制作過程をもつて描かれているとは限らないが、日頃日本画とは馴染の薄くなっている人達にも、伝統的な日本画の一つの制作方法を知ってもらうことができたのではないかと思う。

また、作家の側面を紹介する意味で、図書コーナーを設け、著書をはじめ関係図書の展示、自由閲覧を試みたが、展覧会を構成する一要素として資料展示というものをどう扱うか、まだまだ今後の課題として残されている。

展覧会の周辺

作品を鑑賞する上でその作家を知ることが作品に一層の親しみをおぼえるものであるが、今回は毎土曜日の



美術を語る会

午後二時から「講演会」「美術を語る会」「映画会」を併せて行ってみた。

講演会は作家自身により語られその人柄に聴衆は魅了されたが、一方では筑波大学の桑原教授を囲んで、東山芸術を創り上げているもの、特徴といったものが話し合われた。

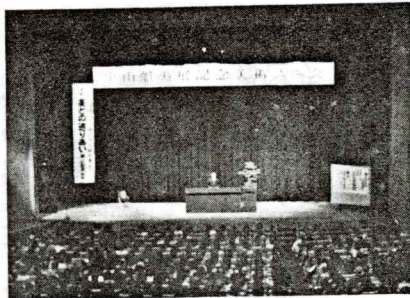
この会では、一方的に講師の話しを聞くということではなく、参加者が自由に意見を交換しあう場ということでも、今後も行っていくことが、その考えが定着するには今少し時間がかかりそうである。

美との巡りあいを語る

「東山魁夷展」記念講演会より

特別展、東山魁夷展記念美術講演会は、三月十八日(土)午後2時より、千葉市民会館で開催された。

この講演会は、特別展「残照から唐招提寺障壁画まで」東山魁夷展の開催に伴う記念事業の一環として、千葉県美術会の後援により行われたもので、この日、市民会館には開館一時間前から熱心な方々の列が続き、開館まもなくホールのお客様は、千人の聴講者で満席となった。



講演会風景

この講演会聴講者は、二月二十日まで申込まれた約二千人的中から、幸運の入場券を射とめた人で、中には、五か月も前より申込んだ人もあった。

講演に先きだち、映画「春の野に語る」が上映され、東山魁夷先生のプロフィールが紹介された。

このあと、高橋副館長の開会のあいさつにつづき、主催者の市原正夫館長の本講演会を迎えるまでの経過や意義をまじえたあいさつと、浅見喜舟千葉県美術会々長のあいさつと、美との巡りあい「残照から唐招提寺障壁画まで」と題した、東山先生の講演が行われた。

先生は、絵画は無言の芸術であり、作品とそれを見る人との間に交わされる言葉でない会話であると前置きされ、私の画業は「残照」から「唐招提寺障壁画」の間に凝縮されている。「残照」は画家として認められた作品であり「唐

招提寺障壁画」は三十年の画業の集大成である。美術学校卒業後の長い間の暗中模索の時期、母や兄弟をなくした生涯のどん底、悲しみを味わいつくし、将来の希望のもてない私は、二十一年の冬、鹿野山の九十九谷を眺めていると自我が消滅して、あるいは心が澄んで自然と自己とが生命を共有するもののように思えた。冬枯れの悲しい山々その寂寥が私の心にむしろ安らぎを与えてくれた。その九十九谷の実景と昔歩いた甲州信州の山々を二重写しに生まれれた作品が「残照」である。そして三十年の間に、北欧風景画、京洛四季、白馬の見える風景等そして唐招提寺障壁画を描いてきた私の歩みを辿ってみると、「残照」が根底になつており「遍歴」と「回帰」、「あこがれ」と「郷愁」のくりかえしのように思えると語られました。

なお、この講演会に出席できなかった方々のために、講演を記録したテープを用意してあるので、御利用希望者は学芸課普及広報班におたずねください。

各種講座 あんない

●デッサン入門講座

本年度の実技講座は、「デッサン入門講座」「七宝焼講習会」「てん刻入門講座」を予定しています。

「デッサン入門講座」は、石膏像(首像)をモデルに、形や明暗のとらえ方、質感や量感の把握などの絵画表現の基礎的な学習を目的としている。期日は、 $\frac{1}{2}\% \cdot \frac{1}{2}\% \cdot \frac{1}{2}\% \cdot \frac{1}{2}\%$ の三回で、各々定員は四〇名。会費無料。県立美術館研究工作室で実施の予定です。

本年度も六回実施し、自由参加を原則とするが、会員制も設けています。詳細は、学芸課普及広報班へ。

●美術を語る会

昨年度より開催し、好評を得たので本年度も引き続き行います。

本会の目的は、美術一般に関する問題をテーマに「語り合い」の中から、作家や作品をはじめ各国の美術館等についての知識や理解を深めることにあります。

本年度の予定は次の通りです。

第 1 回	
期 日	53・5・20(土)
テーマ	「黒田清輝」
第 2 回	
期 日	7・22(土)
テーマ	近代日本の版画
第 3 回	
期 日	9・30(土)
テーマ	夭折の画家たち
第 4 回	
期 日	11・11(土)
テーマ	県展30年の歩み
第 5 回	
期 日	54・1・13(土)
テーマ	堀江正章 とその弟子たち
第 6 回	
期 日	3・3(土)
テーマ	美術と「私」

新収蔵作品紹介

（52年11月～53年3月）

購入

永瀬義郎作「孔雀の女王」「祈り」「つる草のギター」「もの想う天使」

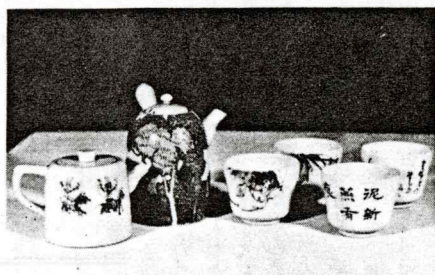
池田満寿夫作「水彩」「Something」「開いたブラウス」「ウェルカムB」「マーガレットの庭」「シンデレラの広告」「中間」「ハートの位置」「午後」「遥かなる通り」



池田満寿夫
「マーガレットの庭」

浜口陽三作「草花」「魚とさくらんぼ」

浅井忠作「婦人像」「茶器」「猿蟹合戦ノ図」「茶器」「皿」「農



茶器



婦人像

家風俗図「花瓶」「向付皿・楊子挿」「茶托」「羅漢像」「墓仙人像」「農婦像」「舞楽面」「図案画稿」「書籍」（月瀬紀行他）二十二冊「黙語印」「黙語焼印」「絵皿」



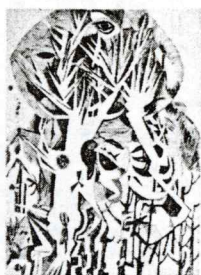
図案画稿

鈴木治平作「条紋金彩花瓶」

原三郎作「廢船」

宇津木紅来作「鶯」

瑛九作「瑛九銅版画集1～5」



「瑛九銅版画集」より

寄贈

なお、次の資料が寄贈されました。ここに厚く御礼申し上げます。

永瀬義郎作「永瀬義郎詩画集『田園交響曲』」

石井武夫氏より
石井武夫作「DUMMY」「DUMMY（Ⅱ）」

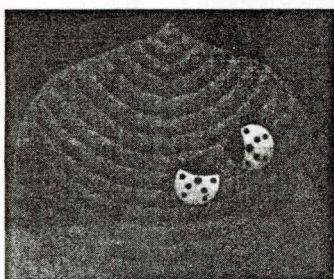


石井加代氏より
「浅井忠十三回忌記念猿の面」「研究誌『人文』（浅井忠武士の山狩関係論文）」
永瀬てる子氏より

美の泉

浜口陽三

浜口は、世界を代表する版画家である。メソチントと呼ばれる技法を駆使して、



彼は銅版に日常身辺のごくありふれたものを描き上げる。葡萄、さくらんぼ、ういきょうなどの果物や野菜が、てんとう虫・魚などの虫や魚介類が彼の小宇宙を構成する。簡潔化された孤独な世界。ロウソクの炎で照らされたような明暗の中で、オブジェは現実から「もの」としての生命を与えられる。彼の世界には、いつも限らない喜びと悲しみが同居している。

浜口は、和歌山県で生まれ、六歳の時銚子に移り住む。生家は、現ヤマサ醤油である。



■好評を得た木版画実技講座
昨年度最後の実技講座として、星襲一氏（版画家）を講

トピックス

■待望の美術普及棟
実施設計費がつく

開館以来の祈願であつた美術普及棟がいよいよ建設される運びとなつた。

昨年度より美術普及室で代用し利用者の方々に御不自由を

かけてきましたが、完成は今や時間の問題です。数年のうちには、アトリエ・講堂などが実現し、「みる・かたる・つくる」の二本柱が確立することでしょう。

師に、二月十八・十九日の二日間開催された。

会場は、五十名の受講生と講師とのコンビネーションプレイにより熱気あふれ、出来あがつた作品は、初心者とは思えない程立派な、みごたえのあるものとなりました。

制作の喜びをしみじみ感じる講習会でした。

■四〇万人目の入場者

親しまれる美術館を目ざしてきたが、四月十六日、四〇万人目の来館者を迎えることができた。その人は、千葉市高州の中島治子さんで記念品を贈呈した。

職員異動

昭和53年4月1日付で次の職員の異動がありました。

○転出者

佐藤信夫（長生村立高根小学校）

高橋勝利（房総風土記の丘）
米田耕司（教育庁文化課）
大久保守（房総風土記の丘）
渡辺真弥（私立紅陵高校）

伝言板

●美術館友の会では、本年度の会員を募集しています。詳細については、美術館内友の会事務局まで問い合せください。

●駐車場が、一方通行となりました。車でお越しの時は、標識に従って運行してください。

●館の展覧会や、その他講座等に関する御意見や、「談話コーナー」への投書を御寄せください。

●本年度より館報は発行回数五回とし、より充実したものとします。

○転入者

鶴之沢康雄（副主査）
川野 仁（主任主事）
宮内速男（文化財主事）
石井文孝（学芸員）
青木 了（嘱託）

転出者の労をねぎらうとともに、新しい職員の活躍を期待します。

談話コーナー

東山魁夷展の終りに

辻 麻子（千葉市）

会期中私は心も空に過しました。家事をして居ても、寛いで音楽を聞いている時も、そして蔵書の「六本の色鉛筆」を読み返して居る時でさえも美術館の展示室へのあこがれをどうすることも出来ませんでした。

難しい絵画の技法のことは、無知な私にはわかりません。ただ絵が好きで、パリ・ロンドンなど欧州各地の美術館に世界的な名画を鑑賞した経験は一度ならずありますのに、この度の展覧会に対するなつかしさと云ふか、何時もその中に浸って居たい、こんな気分になつたことはありません。

県立美術館創立以来最多数の入場者を集めた会場ですが、そのざわめきの中で私は独りになりました。暖く

清らかで、無限の空間の感じられる余裕とでも云ふべきものが、私を安らかに包むのです。そして、なにがなしのうら寂しさにも、うっとりさせられるのでした。かくて私は老女の身をも忘れて毎日のように海なりの美術館めざし自転車のパダルを踏むことになりました。十八日の講演も拝聴し、そして廿九日はからずも会場に画伯御夫妻をお見かけしました。何かささやき交しておられるお二方の間に交流するなごやかな気分をほ、えましく、それとなく注目していると、画伯の傍の小さな男の子に何か一言一言言葉をかけられた御様子のなんと暖かくて謙虚なこと。私はこの驚くべき質量ともに優れた画業の万人を虜にするその本質がおぼろげながら解つたように感じました。

日日暗闇に向つて落ちて行くような世相の中に、無限の優しさや憩ひを与へられたこの展覧会に名残を惜しみつつ、感謝のおもひで一杯でございます。

本館企画の展覧会案内

房総の書芸展

7月20日～8月31日

書の源流を求めれば、中国の遥か二千余年の昔であるが房総では、奈良時代に源流が求められる。しかし、文字は久しい間大衆には無縁であったが、江戸時代以降は生活に関連して普及し、学芸の振興とともに、その美も多彩になった。

ここでは、用の美と芸の美の実相を房総人の手による遺産から理解し、書芸の振興に資したい。

展示作品の内容面では、中近世の作品（書幅、まくり、色紙、短冊、往来文等）約百点を展示する。例えば、書幅では、依田学海（一八三〇～一九〇一・佐倉市）など約三〇点、まくりでは、大村蕉雨（一八三〇～一九〇一・山武郡九十九里町）など十点、その他、鶴沢聡明、白井鳥酔など、色紙、短冊、往来文をまじえ約六〇点を展示する。

千葉県移動美術館

本館では、昭和四十九年の開館以来、郷土に関わりのある美術家を中心に、作品の収集に努めてた。

昨年度、新たな試みとして、本館所蔵作品の活用を図るとともに、併せてより広範な地域の県民の皆様に鑑賞の機会を供するため、県立上総博物館、県立安房博物館の協力を得て移動美術展を行い、主として、房総に関係深い作品を選び、特別出品として浅井忠の作品及び関連資料を公開し、大方の好評をいただくことができました。

本年度も、七月十八日から七月三十日まで松戸市文化ホールで、八月一日から八月二十七日まで県立総南博物館で開催する。

出品内容は、現在準備中ですが、本館収蔵作品の中心を構成している何人かの作家に焦点を当てて選定の予定です。

団体展（5月～7月）

▽歩会彫刻展	4・25～5・7	無料
▽千葉工芸展	4・25～5・7	無料
▽千葉新協美術展	5・2～5・7	無料
▽二科千葉支部展	5・16～5・21	無料
▽墨の県展	5・23～5・28	無料
▽独立美術千葉県在住者展	5・30～6・11	無料
▽精鋭展	5・30～6・11	無料
▽千葉県書道協会展	6・27～7・2	無料
▽千葉県書壇秀技展	6・27～7・2	無料
▽シンポジウム＆青板会展	7・4～7・16	無料

隈元謙次郎氏

昭和五十三年一月二十五日、逝去、七十四歳。

氏は、わが国の近代美術研究の草分けとして、昭和十四年「明治初期に來朝せる伊太利亜美術家とその功績」で第一回レオナルド・ダ・ヴィンチ賞を受賞。文化財保護審議会専門委員。本館評価委員。

来館者

2月	3月	13日
来館者	和歌山県立近代美術館 富山県教育委員会	日記抄
28日	29日	30日
松井千葉市長	今井県教育長 東山魁夷氏	東平県教育委員